心理学のデカラージュ

—心理学の歴史と現状について—

山本　政人

ピアジェ（Piaget, J.）は発達におけるデカラージュ（ずれ）の現象を指摘した。デカラージュには垂直的デカラージュと水平的デカラージュがあるが，特に注目されたのは後者である。垂直的デカラージュとは，操作の構造が同じであっても，操作のレベルが異なるとそれが可能になる年齢時期が異なるという現象である。これはいわゆる発達であって，たとえばある地点から別の地点へ移動するのは感覚運動レベルの活動であるが，ある地点から別の地点への移動経路を地図に描くのは具体的操作レベルの活動である。移動することは乳児にもできるが，地図を描くことは具体的操作レベルに達した児童でなければできない。

一方，水平的デカラージュはピアジェが保存概念の研究において指摘した現象である。保存概念とは，その外観が変化しても数や量は変化していないことがわかることを言う。液量の保存実験では，二つの同じ容器に入った同じ量の液体の一方を形状の異なる別の容器に移し替える。非保存段階の子どもは，見かけが異なるため，液体の量が増えたあるいは減ったと判断する。しかし保存段階に達した子どもは，見かけが変わっても量は変わらないと判断できる。このような保存概念には，数の保存，液量の保存，容積の保存等があるが，保存の対象が数か液量か容積かによって，保存概念が成立する時期にはずれがある。これが水平的デ

カラージュである。すなわち同じ保存という操作でも，その対象が異なると成立する時期にずれが生じるという現象である。

しかしながら小論で論じるのはピアジェが指摘したデカラージュではない。小論では心理学という学問におけるデカラージュ（ずれ）について論究を試みる。学問としての心理学が成立して1世紀余りが経過し，その歴史を発展と言うことは容易である。しかしそれは本当に発展であったのか。確かに研究の技術において進歩は認められるが，理論や方法論は旧態依然であると言っても過言ではないと思われる。心理学の発展とは何であったのか。発展した部分とそうではない部分があるとすれば，そこにはずれが生じているはずであり，それが現在の心理学においてどのような形で現れているのか。小論は心理学における様々なデカラージュについて考察することを目的とする。

心理学史の歴史認識

心理学の成立から今日までを概括するのがいわゆる「心理学史」である。心理学が成立してわずか1世紀余りであることはさておき，心理学の歴史は世界の歴史や日本の歴史とは様々な点において異なる。世界や日本の歴史は，残された多くの資料から事実を明らかにし，さらに事実と事実の関係を明らかにすることによって構築される。心理学の場合には，残された資料はあるものの，その一つ一つを吟味して事実を明らかにするという緻密な作業から構築される歴史ではない。そして何年に何があったかという編年体的な記述より，誰がどのような研究をし，どのような説を唱えたかという紀伝体的な記述が採られている場合が多い。

すなわちこれまでの心理学の歴史とは，心理学にかかわった人間の歴史であり，著名な心理学者と近接領域の研究者の研究を時系列的につないでいくことによって作られている。実際，心理学の歴史を扱った文献は，年代順に心理学の学派，それぞれの学派の心理学者について叙述するという形式のものがほとんどである。たとえば『講座　心理学　1　歴史と動向』（末永他，1971）では，「連合主義」，「精神分析」，「ゲシタ

ルト心理学」等の学派別に研究者の研究と理論が紹介されている。その後でイギリス，ドイツ，フランス，ソビエト，日本と国別の研究動向が紹介されているのはユニークであるが，アメリカについては諸学派の叙述においてその多くが紹介されており，国としての紹介はされていない。

類書も概ね似通った叙述方法を採っているが，異なるものもある。『通史　日本の心理学』（佐藤・溝口編，1997）は資料をもとに時代ごとの研究者と研究について詳しく紹介した異色の文献である。むしろ歴史研究本来の方法を用いた文献で，理論の解説と評価よりも，事実を整理し明らかにすることに重きが置かれている。資料の収集，整理という点では，他に例のない貴重な文献と言える。しかし仮に心理学史を学派や研究者の研究や理論の叙述と規定すると，この文献はその規定からは外れると言わざるを得ない。この文献では，研究者の研究や理論の内容より，その経歴や事績が述べられており，学会の動向についても会員数，報告数の推移などの統計的資料が紹介されている。

すなわちこの文献の心理学史として異色な点は，日本の心理学の理論動向についてほとんど触れられていないことである。意図的にそうしたのか，やむを得ずそうなったのか，どちらかと言えばおそらく後者であろう。その理由は日本の心理学の理論動向がとらえにくいためであるに違いない。『講座　心理学　1　歴史と動向』の日本に関する記述も，明治から第二次大戦直後までの日本の心理学者の事績を紹介しているが，彼らが欧米の心理学に学び，日本の大学において欧米の心理学研究を展開していった事実の紹介であり，日本独自の研究動向と言えるようなものがなかったのではないかと思われるのである。

研究動向と言えるものが見えてくるのは，戦後心理学諸分野の研究が活発化し，「日本心理学会」以外に「日本グループ・ダイナミックス学会」，「日本教育心理学会」等の単科学会が設立されるようになってからである。『日本の心理学』（『日本の心理学刊行委員会』，1982）においては，戦前については「わが国心理学界の諸先達」という形で戦前の心理

学者19名を紹介し，戦後については「戦後わが国心理学の展開」および「心理学の諸研究」という形で研究の動向と内容の紹介を行っている。

すなわち日本の心理学が一定の研究基盤を確立して本格的に活動を開始したのは，新制大学発足の後であると言っても過言ではなく，そのため日本の心理学の研究動向を把握しようとした時，戦後の研究の展開はせいぜい半世紀足らずの「歴史」とも言い難い期間でしかない。したがって心理学の研究動向を把握するためには，日本に限らず世界，特に欧米にまで視野を広げるか，戦前のわが国における研究を詳細に追跡する必要に迫られる。一般の心理学史は前者の方法を採り，日本の心理学史は後者の方法を採っている。

ただ，日本の心理学史については，戦前・戦中と戦後の連続性の問題が検討されていないように思われる。『通史　日本の心理学』においては，あたかも戦前・戦中の日本の心理学が復活・再開し，発展していったかのように述べられているが，果たしてそうなのであろうか。戦前・戦中と戦後の心理学は，研究の量だけでなく，質的にも異なるものであるようにも思われるのであるが，戦前・戦中から戦後へと続いているものを見出すことができるのであろうか。

乾（1987）よれば，戦後占領軍によって教育の刷新が行われた際，心理学が教育の基礎科学として位置づけられ，「教育心理学」の普及が図られた。東京大学で日本の心理学者が集められ，アメリカ人講師と岡部弥太郎と田中正吾が講義を行ったが，乾もそれに出席し，次のような質疑応答があったと述べている。

「教育心理学」は学問の領域として認めうるものなのか，その理論的（といったか，「方法論的」といったかははっきりしないが）基礎づけは？　というような質問が出たのを思い出す。その答えがおもしろかったからだ。

「諸君が，この新しい学問領域について，いろいろの疑問を持たれる

のは当然である。わがアメリカにおいても，最近まで，この学問は認められていなかったのだから―。しかし，こんにちアメリカの諸大学はこの講座をもち，また何十冊（たしか彼はもっと具体的な数字を挙げた）も出版されておる」

この乾の個人的回想にどれほどの資料的価値があるのかはわからないが，この回想からは教育心理学が戦後アメリカによってわが国に導入されたと考えられる。このことは戦前・戦中と戦後の心理学との非連続性を示す例であると言えよう。戦前・戦中と戦後の日本の心理学の非連続性を指摘し，検討した心理学史は見当たらない。今後の研究課題であろうが，乾の回想と日本の心理学史の記述にはずれがあると言える。しかし個人の経験と歴史的事実が食い違うのはむしろ当然のことである。個人が経験できるのは同時代の限られた事柄に過ぎず，歴史に残る事実はそれとは異なるものであるかもしれない。乾の回想のように，歴史に記されていない事実があったとしても不思議ではない。問題は歴史を記述する際の観点，すなわち歴史観である。

仮に日本の教育心理学の戦前と戦後の連続性を強調しようという意図があったとすれば，乾の回想や東京大学での講義のことは等閑視されるかもしれない。もちろん日本の心理学史がそのような意図的記述を行っているとは思われないが，戦前・戦中と戦後の連続性を強調するような記述は見られる。たとえば『日本の教育心理学』（山下，1982）においては，日本の教育心理学の成立を明治期にまで遡り，戦前から戦中にかけての「教育科学研究会」の運動や「錬成心理学」の成立等に日本の教育心理学の展開を見ている。しかし第二次大戦までの教育心理学と戦後のそれを同じものと見てよいのかどうかについては検討の必要があると思われる。

『日本の心理学』においては，複数の心理学者が戦前から戦後に至る城戸幡太郎の事績を紹介し，彼を日本の心理学発展の功労者として称えている。城戸は戦前「教育科学研究会」の中心人物であったが，戦時体

制の下で会は弾圧され，城戸も検挙される。そして戦後になって彼は日本教育心理学会を設立する。心理学者としての城戸の生き方は戦前戦後を通じて一貫しているように思われる。城戸を中心にして心理学の歩みを見ると，それは一貫性，連続性のあるもののように見える。しかしそれは一つの見方であり，別な見方も可能であろう。

心理学のパラダイム

吉田（2000）は20世紀の心理学のパラダイムが，行動主義から認知的構成主義（なぜ認知主義ではなく認知的構成主義としたかはよくわからないが，やはりPiagetを意識した用語であろう）へ，そして社会的構成主義へと移行したとしている(吉田はパラダイムという用語を使わず，「枠組み」という語を用いている。小論でもその程度の意味でパラダイムという用語を用いる)。行動主義から認知的構成主義への移行，「認知革命」とも呼ばれる変化は，多くの心理学者が認めるところであるに違いない。かつて心理学は「行動の科学」であると自己規定し，今なおその影響は根強い。それは「心なき心理学」（海保，2003）であり，心理学が実験室に閉じこもり社会とコンタクトを持たなかった時代はともかく，今日の社会一般の心理学に対する認識と期待からはかなり外れたものである。20世紀後半になると心理学は「行動の科学」の鎧を少しずつ脱ぎ始めた。やがて認知への関心が高まり，それが心理学のメインテーマとなった。

心理学の認知研究は，たとえばピアジェの認知発達の研究のように，当初から独自のものと言うより，周辺諸領域の様々な研究とリンクしていた。特に人工知能研究との連係によって認知研究は隆盛を迎えた。しかし皮肉なことに，それが心理学における認知研究の混迷を招いたようにも思われる。元来両者は目的が異なっており，心理学は人工知能研究とは異なる独自の研究を進める必要があった。人工知能研究との連係によって作り出された心理学のモデルは，常に人間に適用することの妥当性を問われる。人工知能研究者ならばそれは「わからない」と答えて差

し支えないが，心理学者はそうはいくまい。そしてモデルが人間に適用できることを示すことは極めて難しい。それが人間に適用できることが示されなければ，モデルは「机上の空論」である。学問において「机上の空論」の価値が低いというわけではないが，心理学が積極的に社会とのコンタクトを図るようになった今日，心理学における「机上の空論」への関心はかつてほど高くはない。

それは最近の学会の動向に如実に現れている。学会あるいは学会を母体として作られた団体が認定する「資格制度」が数多く設立されたことが，最近の日本の心理学諸学会の動向を端的に現している。そして研究の内容にもそれは反映されている。たとえば日本教育心理学会では，機関誌『教育心理学研究』に「実践研究」という論文カテゴリーを設け，教育実践への接近を図ったが，「実践研究」の論文数は確実に増加している。

このように日本の心理学諸学会は積極的に社会への接近を図るようになり，社会のニーズを敏感に察知して「資格制度」を設けた。この「資格制度」が果たして社会のニーズに応えられているかどうかについては様々な見方ができるが，ここでは心理学が社会への接近を図ったことの現れととらえ，その結果，研究にどのような変化が生じたかについて考察する。

心理学が社会への接近を試みた結果としてのパラダイムチェンジなのか，あるいは心理学のパラダイムチェンジが社会への接近をもたらしたのか。おそらくは前者であろうが，後者を否定する根拠もない。ここで言う心理学のパラダイムチェンジとは，吉田が指摘した「認知的構成主義から社会的構成主義へ」という変化のことである。吉田によれば，1980年代の終わりから，ヴィゴツキー（Vygotsky, L.S.）の考え方＝状況的認知論（吉田はこのようにとらえているが，ヴィゴツキーの考え方と状況的認知論が同じものかどうかは疑問である。社会的文脈や文化的状況を重視したとは言え，ヴィゴツキーは状況によって発達や認知が規定されるとまでは考えていないように思われる）が再評価され，人と世

界との相互作用を，記号系のモデルや方法論を使って理解するのではなく，実際の文脈の中で観察したり非記号のモデルで構築することが重視されるようになった。

私見では，確かに20世紀末から社会的構成主義というタームをよく目にするようにはなったが，それが何であるかは実のところよくわからない。そして吉田が指摘するように，社会的構成主義が認知的構成主義に代わるパラダイムなのかどうかもよくわからない。穿った見方かもしれないが，人工知能研究に触発されて一時活況を呈した従来の認知研究が行き詰まり，突破口を模索した結果見つかったのが，ヴィゴツキーの理論，状況論，「温かい認知」等であったということではあるまいか。

状況，文脈，文化といった方面に心理学の関心が向けられるのは当然で，分野によっては早くからそれを研究に取り入れてきた。認知研究も遅れ馳せながらという感があるが，これにも人工知能研究の影響があるのではないかと思われる。人工知能研究においてよく指摘される問題として「フレーム問題」がある。「フレーム」とは与えられた課題についてどこまで考えればよいかという枠組みのことで，柴田（2001）によれば，「<何を考えなくていいか>ということを考えずに，考えなくてもいいことをいかに考えないですますか」という問題である。わかりやすく言えば，人工知能には状況とか文脈とかが理解できず，たとえ短時間で厖大な情報処理ができたとしても，適切な問題解決には至らないであろうということである。

人工知能研究においてはこの「フレーム問題」が言わばネックであり，それ故に人工知能は実現不可能ということを暗に示しているようにも取れる。その一方で，状況や文脈というものを理解し，適切な問題解決をすることができる人間の認知の優位性を示しているとも言える。そして今日の心理学における認知研究の関心はまさにこのことに向けられている。人工知能にできない状況や文脈の理解が，人間では簡単にできてしまう。本当に簡単にできるのかということについては検討の余地があるが，人間における状況・文脈の理解の重要性が，人工知能研究の側から

認識されたと言える。

社会的構成主義と呼ばれる立場が，人間の認知における状況・文脈を重視していることは間違いないであろう。そして状況を重視し，認知が状況に規定されているとしたのが状況的認知論である。状況的認知論は，小は発話が状況・文脈によってその意味するところが違ってくるといったことから，大はおそらく生物の進化の問題に至るまで，すなわち認知に関するあらゆる事象に適用され得る考え方であると思われる。心理学においては，特に発達や教育との関係で論じられている。

発達の問題に関して，認知的構成主義においては，人間の認知は段階的に発達し，その段階は普遍的なものであるとされてきた。環境の違いによって様々な差異が生じることも知られていたが，そのことよりも普遍的な発達段階の存在が強調されてきた。これは発達において主体性を強調しようとしてきたためであったかと思われる。環境や状況の重要性を強調することは，結果的に主体性を過小評価することにつながる。20世紀初頭から「児童中心主義」のような主体性重視の思想が一世を風靡したが，心理学もその影響を受けただけでなく，その一翼を担ったと言える。児童心理学の成立と発展はその最も顕著な現れであるが，ピアジェの一連の研究はその中でも特に注目に値するものであったと言えよう。

主体性の強調は児童心理学の分野に限ったことではなかった。かつての心理学の牙城とも言うべき学習研究においてもそれは顕著であった。たとえばスキナー（Skinner, B.F.）のオペラント条件づけは，外部刺激によって学習が成立するにしても，主体の能動性・自発性を強調するものであった。古典的条件づけは言うまでもなく，スキナー以前の行動主義が主体を環境に動かされる受動的な存在ととらえていることは明らかであろう。二つの大戦を経た20世紀後半の世界においては，自由，平等，民主主義等が唱われ，それが学問にも様々な影響を及ぼしたと思われる。心理学にもそれが反映されているという明確な証拠はないにしても，そのように考えることに無理があるようには思われない。20世紀

前半の行動主義がプラグマティズムを背景としていたとすれば，その後の主体性重視の流れは民主主義とそれにまつわる諸潮流を背景としていたに違いない。そして主体性重視の潮流が行動主義から認知的構成主義への移行をもたらしたと見ることも間違いではあるまい。

しかしその一方で，環境，状況，関係といった主体の周囲の事象へも関心は向けられていた。発達分野における認知的構成主義の旗頭であったピアジェの研究に対して，ヴィゴツキーは鋭い批判を浴びせた(1962)。「自己中心的言語」を巡る論争である。幼児の独り言をピアジェは自己中心性故に現れる「自己中心的言語」であるとした。これについてヴィゴツキーは，言語は幼児にとってもコミュニケーションの手段であり，独り言はコミュニケーションとは別の機能を持つものであると考えた。すなわち幼児の独り言は思考の手段である内言が外言化したものであり，幼児期は言語がコミュニケーションの手段から思考の手段へ移行する時期であるため，独り言が現れるとヴィゴツキーは考えた。ヴィゴツキーはこのことから，一般に人間の高次精神機能は精神間の機能として獲得され，後に精神内の機能へ移行すると主張した。社会的構成主義はヴィゴツキーによってその土台が築かれたのである。

その後，日本においては早かったが，アメリカにおいては1980年代にヴィゴツキーの研究が紹介され，注目を集める。「鉄のカーテン」の向こうにあった理論が，アメリカの心理学者の目には新鮮に映ったのであろうか。おそらく欧米の心理学においても，社会や文化への関心，それらを心理学でどのように扱うかについての関心が高まりつつあったためであるに違いない。ヴィゴツキーがピアジェに対して行ったような，人間の社会的および文化的側面を無視しているという批判が認知研究に対して盛んに行われるようになった。

この「ヴィゴツキー・ルネサンス」とも呼ばれるヴィゴツキーの再評価から20年が経過した。社会的構成主義や状況論という考え方が知られるようにはなった。しかし研究テーマや研究方法に変化は生じていないように思われる。特に研究方法に関しては，行動主義，認知的構成主

義の研究方法が依然として心理学の正統であり，社会的構成主義独自の方法を用いた研究があるのかどうか定かではない。吉田が社会的構成主義の研究の具体例として挙げているのは，古典的な異文化研究，比較研究であり，新しいパラダイムによるものとは思われない（吉田が対象とする分野の特殊性のためでもあるが）。社会的構成主義はパラダイムどころか，心理学研究としての実体が見えず，もしかするとスローガンに終わるかもしれないのである。このように心理学の新しいパラダイムと研究の実態との間には大きなずれがある。果たして新しいパラダイムは研究をリードしていくのであろうか。

実は行動主義から認知的構成主義へ，そして社会的構成主義へというパラダイムチェンジは，実証的心理学（さらにその中の教育・発達系心理学に限定すべきか）の中での言わば「コップの中の嵐」である。今や心理学はより大きなパラダイムチェンジに直面しているのであるが，そのことについて論じる前にもう一つの重要なずれについて検討しておきたい。

方法論の変化

『行動科学の方法』（池田，1971）は心理学の研究方法のバイブルとも言うべき文献である。心理学が行動科学であると標榜して憚らなかった時代はもちろん，今日でもなおその価値は不変である。なぜなら心理学の研究方法のテキストは今や数多く刊行されているが，その内容は基本的に変わっていないからである。

もちろん変わっている部分もある。臨床的あるいは実践的研究の方法に関する説明が加えられていることである。たとえば『心理学研究法入門』（南風原他，2001）を見ると，『行動科学の方法』で力点が置かれていた量的分析と並んで，観察，面接，フィールドワークでの質的データの分析にも紙数が費やされ，さらに教育・発達，臨床における実践研究の方法について解説が行われている。

実践研究は前述のように『教育心理学研究』において設けられたカテ

ゴリーでもあるが，それは「授業研究，教育方法，学習・発達相談，心理臨床等の現実場面における実践を直接の対象とした教育心理学的研究であり，学校教育のみではなく，幼児教育，高等教育，社会教育等も含まれる。実践場面での資料収集，実践の改善を直接目指すもの，教育心理学的な見地からの分析と考察にもとづく具体的な提言がされていること」と定義されている。

『教育心理学研究』の実践研究は，市川（2000）を皮切りに毎年増加している。市川の論文は「認知カウンセリング」すなわち学習指導の方法に関する事例研究である。中学生の学習指導事例から，指導方法についての検討と提案を行ったものである。その後も事例を通して指導・援助方法の検討，提案を行うというスタイルの論文は掲載されているが，教育実践において実験的に指導方法の効果を検証するという従来型の論文も増えてきており，事例研究や統計的分析に頼らない研究は，研究全体の中ではやはりわずかであると言える。

今後も実践研究は増えていくであろうが，おそらく増えるのは実践を対象としつつ，方法は実験や調査といった従来のスタイルの心理学論文であろう。実践への接近の努力は成果を挙げているとも言えるが，否定的な見方をすれば，状況はあまり変わっていないとも言える。事例研究は心理学の方法としてはむしろ古典的なものであり，行動主義の時代には，それは過小評価され，近年漸く見直されてきたものである。統計的分析は依然として揺るぎない地位を保っている。

時代によって流行り廃りはあるとしても，心理学の研究方法は行動主義の時代以来変わっていない。心理学においては，実験のような科学的方法と事例研究のような臨床的方法とが当初から用いられてきた。新しい方法を模索するまでもなく，心理学においては古くから用い得る方法が用いられてきたと言える。変わったのは研究の技術である。コンピュータを駆使した高度な統計解析やインターネットによる情報交換が可能になるなど，技術革新によって研究も少なくとも量的側面においては発展したと言える。しかしそれが心理学そのものの発展なのかどうかは，

軽々に判断できない問題であると思われる。

心理学の技術の進歩を喩えて言えば，東海道を徒歩で移動していたのが，30年ほどの間に鉄道が敷かれ，新幹線で移動ができるようになったようなものである。今となっては徒歩で移動する者はいない。何が変わったかと言えば，短時間で長距離を移動できるようになったということである。心理学の場合には，要するに研究論文の量産が可能になったということである。新幹線は経済発展に貢献したが，心理学の情報処理技術の進歩がもたらしたのは研究の量的発展である。おそらくそれは社会の側から見れば微々たる貢献であり，学界という限られた枠の中でのことに過ぎない。

心理学の社会への接近は，社会への何らかの貢献を迫られていることの現れでもあるが，論文を生産するという狭い意味での研究活動だけでは，社会への貢献と言うには値しないかもしれない。社会に直接かかわる活動が必要であり，研究者としては，それを狭い意味での研究活動と結びつけることが重要な課題となる。『教育心理学研究』や『心理学研究法入門』における実践研究は，そのような課題への取り組みの現れである。そして実践研究や臨床的研究は，必ずしも高度な情報処理技術を駆使するわけではなく，むしろ古典的な事例の記述や解釈を用いる。技術としては新幹線と徒歩ほどの隔たりがあるが，今や徒歩が見直されているのである。このことは方法論の変化というだけではなく，心理学が行動主義，認知的構成主義の中で失ったものを取り戻そうとしているかのようにも思われる。これをロマン主義への回帰ととらえる向きもあるかもしれないが，事態はそのような牧歌的なものではない。

心理学は科学的方法を堅持しつつも，実践的，臨床的研究を推進するに当たり，古典的な方法をも必要とするようになったのである。古典的な方法の復活は，心理学が社会への貢献という課題に取り組もうとしていることの現れではないかと思われる。

心理学と社会

古典的方法の復活は，専門家である心理学者と非専門家との境界を曖昧化することになる。すなわちアカデミックな心理学と素朴心理学の境界を曖昧にするとも言える。

多くの人間は内省することができ，自己を認識することができる。ところがそれは不十分，あるいは誤りであるとするのがアカデミックな心理学である。科学的な方法によってこそ「正しい」認識が可能になると言うのがこれまでの心理学者の主張であった。ところが素朴心理学は，科学的であるかどうかはともかく，内省報告や主観的解釈を肯定し，むしろそれらを積極的に用いる。心理学者もそれらを用いるようになると，素朴心理学と重なる部分が出てくる。それでも心理学者にとっては素朴心理学との違いは明白である。理論，科学的方法，厳密な手続き，情報処理の技術等，素朴心理学にはないものをアカデミックな心理学は持っている。

しかしそれが「役に立つ」かどうかとなると話は変わってくる。アカデミックな心理学の理論や方法や技術が「役に立つ」ことを説明することは，おそらくそれほど難しいことではない。しかし一般の人々がそれに納得するかどうかとなると難しい問題である。「役に立つ」かどうかという基準で見ると，一般の人々の目にはアカデミックな心理学と素朴心理学は大差ないものに映るのではあるまいか。佐藤（前掲書）が指摘したように，アカデミックな心理学が追求するものと一般の人々が求めるものの間にはずれがある。これまで両者の間には断絶あるいは敵対的関係があったと言える。現在もそれは続いているが，アカデミックな心理学が一般の人々のニーズに応えようとすれば，素朴心理学の領域に足を踏み入れざるを得ないのである。

「資格制度」は素朴心理学に踏み込みつつも，アカデミックな心理学としての枠組みを維持するための装置であるという見方もできる。すなわち社会のニーズに応えつつ，学問としての水準やモラルを維持し，専門家と非専門家の差異を明確にするという働きが「資格制度」にはある。

現在，この「資格制度」を軸に，学界の再編成，パラダイムの変容が急速に進んでいるように思われる。すなわち臨床心理学の隆盛であるが，それが圧倒的とも言える勢いであるにもかかわらず，吉田の概観においても，海保の入門書においても，臨床心理学についてはまるで眼中にないかのように触れられていない。そのことはこれまでの心理学における臨床心理学の位置を暗示しているように思われる。特に海保の文献は，心理学の入門書にしては臨床心理学に関する記述が極めて少なく，精神分析を心理学とは別の一つの思想としていることは，従来のアカデミックな心理学（実験系心理学とすべきかもしれない）の臨床心理学に対する認識を知る上で興味深い。

臨床心理学の隆盛については，一時的なものであるとかバブルである等の否定的な見方がある。「資格制度」がうまく機能しなくなれば衰退するという見方もある（資格を商品と考えると，需要と供給のバランスは既に供給過剰になりつつある。現在，資格間の競争が起きているが，商品として生き続けるには，市場の拡大が最重要課題である）。しかし臨床心理学は，その歴史，精神医学等の他領域との関係，社会とのかかわり，どれを取っても巨大な学問ないしは思想の体系であることは間違いなく，仮に「資格制度」が機能しなくなったとしても，衰退することはないように思われる。これまでの心理学史においては，臨床は初期の精神分析が紹介されている程度の扱いであった。その理由は定かではないが，今となっては不当な扱いとも言える。心理学史において臨床心理学を位置づけ直す必要があるだけでなく，現在の心理学の中でも再評価する必要があるのではないかと思われる。なぜなら臨床心理学の隆盛こそが，わが国の心理学史上かつてなかったパラダイムチェンジであると思われるからである。

臨床心理学の隆盛に比べれば，社会的構成主義の台頭はアカデミックな心理学の中でのことであり，それ故に「コップの中の嵐」と表現することも間違いではないと思われる。社会的構成主義の台頭はアカデミックな心理学の社会への志向を反映した動向であるには違いないが，社会

とのかかわりという点では，臨床心理学に遠く及ばないと言わざるを得ない。アカデミックな心理学は社会に向けて臨床や実践という看板を前面に掲げる必要に迫られているが，おそらくそれは容易なことではなく，現実には様々な摩擦や齟齬を生じているものと思われる。そして「資格制度」は摩擦や齟齬の原因の一つともなっており，「資格制度」への批判がその分野の研究や研究者への認識を歪めているようにも思われる。このような混乱を避け，現在の心理学の中で臨床心理学を正しく評価し，心理学史の中でも位置づけ直すことが必要であると同時に，現在の心理学全体が置かれている社会的状況を改めて認識し直すことが必要であると思われる。

社会との関係で言えば，心理学は個人や社会に生じている様々な不可解な事象の説明と対策の提示を求められている。しかしアカデミックな心理学は不可解な事象を扱うことに慣れていない。科学は本来，不可解な事象に立ち向かい，その謎を解き明かし，人間の支配下に置くことを目的としているはずである。ところが心理学は，初期において不可解（正確には不可視）な事象への取り組みを放棄してしまった。それが行動主義であり，認知研究に至って多少不可解な事象への接近は試みられるようになったものの，現代社会で次々と生じる不可解な事象を扱うには甚だ力不足である。

アカデミックな心理学は，今なお不可解な事象を避けるという行動主義以来の伝統を守り続けている。「怪力乱神を語らず」である。かつて心理学がいわゆる超常現象にかかわっていたことは，宮城のいくつかの文献（1961他）に見ることができる。いわゆる超心理学であるが，超心理学と心理学の関係は，錬金術と化学のそれのようなものであろう。今なお心理学が求められていることの中には，この錬金術に類することが少なからず含まれている。しかし超常現象について語ることは，心理学がこれまで拘ってきた科学としての地位を危うくすることになる。それは素朴心理学との境界が曖昧になることよりも，はるかに危険なことであるに違いない。見方を変えれば，科学は心理学が「怪力乱神」の領

域に取り込まれないための護符であったのかもしれない。しかし避けることは否定することではない。心理学は「怪力乱神」の領域を避けはしても否定はしない。「血液型と性格」のような俗説を否定しても，宗教的信念を否定したりはしない。それどころか宗教との接点は少なくない。

言うまでもないが，パラダイムチェンジは以前のパラダイムを否定するものではない。臨床的研究や実践的研究が主流になっても，行動主義や認知研究が否定されるわけではないし，まして科学的方法が価値を失うことはない。それを放擲してしまうと，学問としての地位を失うことになるからである。一方，社会的ニーズに応えるためには，従来の枠組みや方法では足りない。そこで新旧様々な枠組みや方法を試みているが，混乱も生じているというのがわが国の心理学の現状ではあるまいか。

社会が大きく変化しようとしていることは，さらなる混乱を生じるのではないかと思われる。社会の中で人間をとらえようとしているが，社会自体が変わろうとしている。このことは心理学と言うより，社会科学全般にとって重大な事態である。社会が複雑化，流動化し，とらえ難くなっていることが，人々の関心を個人の内面に向かわせ，心理学への期待を助長しているのかもしれない。その期待はかつてならば過剰とも的外れとも言えるものであるが，今やそうも言っておられない状況に心理学は自ら陥っているように思われる。

文献

南風原朝和・市川伸一・下山晴彦（編）2001　心理学研究法入門　東京大学出版会
市川伸一　2000　概念，図式，手続きの言語的記述を促す学習指導―認知カウンセリングの事例を通しての提案と考察―　教育心理学研究，48，361-371.
池田　央　1971　行動科学の方法　東京大学出版会
乾　孝　1987　ある戦後　心理学者の自伝的回想　思想の科学社
海保博之　2003　心理学ってどんなもの　岩波書店
宮城音弥　1961　神秘の世界　岩波書店
日本の心理学刊行委員会（編）1982　日本の心理学　日本文化科学社
佐藤達哉・溝口　元（編）1997　通史　日本の心理学　北大路書房
柴田正良　2001　ロボットの心　7つの哲学物語　講談社
末永俊郎（編）1971　講座　心理学　1　歴史と動向　東京大学出版会

ヴィゴツキー，L. S.　1962　柴田義松（訳）思考と言語　上　明治図書
山下恒男　1982　日本の教育心理学　明治図書
吉田　甫　2000　20世紀の心理学を振り返る　教育心理学年報，39，132-145.

（心理学科　助教授）